
茜の呪刻

シロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茜の呪刻

【Nコード】

N1382T

【作者名】

シロ

【あらすじ】

没落呪術師の家系の娘・茜が拾った狐。

それを発端として、彼女が巻き込まれる呪術師たちの諍い。

いつかきつとラブリチャになるはずの、和風ファンタジー。

某所で執筆しています小説の加筆修正版になります。

第一話（前書き）

すみません。種別を短編として間違って掲載しました。こちらが連載となります。

短編はこちら《<http://ncode.syosetu.com/n1379t/>》第一話まるまるです。汗

第一話

「この墨原家は代々佐和の国、帝に仕える術師の家系だ。術力は血の中に溶け込み、己と一体となっている。ゆえに、力とは血、血とは力だ。我が一族は、この「血」ゆえに帝に仕えていた。だが、憎き清原家の策略により、宮廷を追われ、術師として『このよう』立場に甘んじねばならない屈辱っ」

カッコン。

庭の獅子脅しの音が響く。

都の喧噪からはほど遠い、この屋敷の主―口髭を生やした男は、瞼を固く瞑り目の前に『居るであろう』二人の子供たちに語りかける。

「よいか、茜、葵。

お前姉弟は我が墨原家再興の切札」

カッコン。

「憎き清原家より宮廷術師の座を奪い返し、けちよんけちよんに――」

カッコン。

「あなた、あなたってばっ」

カッコン。

「ああ、なんだ？」

「茜も葵もおりませんわ」

この国——佐和の住人にとってはかなり珍しい茶を帯びた髪の色をした女性は、口元に袖口を当ててくすくすとほほ笑む。

その微笑みに口髭を生やした男はとろーんと、なんとも無様——みっともない——、威厳もへつたくれもない表情で、二人は見つめあう。

カッコン。

「はっ！？」

男は突如声を上げ、立ち上がりあたりを見る。

「天音！？茜と葵は！？」

どこに行った！？と女性——天音にくらいつく。

「茜は、『小田部』（おたべ）に行きましたわ。葵は、そうですわね……、きつと清十郎先生の所ですわ」

小田部とは、この佐和の国の都にある甘味処の店の名前であり、清十郎は医師の名前だ。

その二つの名を聞いたとたん男は怒声を上げた。

「ぬわんだと——！！！！あの二人め！！わしの話中に逃げ出したというか！？」

「ふふふ。良いではないですか？今日は、あなたと私の二人きりですわ」

天音は男にそつと寄りかかり、その唇に……

「おかあさまあ！！！！」

突如、すぱーんと襖を開け放ち乱入してきた少女によって甘い雰囲気
気が吹き飛んだ。

「大変です！お母様！谷五^{たしろう}六^くさんで、大根が大根が——！」

少女は抱えた大根を天音に突きつけ、唇が触れる寸前で止まった天音に満面の笑みで叫んだ。

大きな瞳を輝かせ、大根を抱えて小躍りをする。

腰までの長い、佐和の国の住人より若干色の薄い黒髪の毛先がぴよこぴよこと跳ねた。

「安売りしていましたっ。3本で、1文です！ちよつと痛んでますが、見てください！今日は、大根が食べられますう…っ」

「あら！まあ！では、さっそく今晚の夕食に出しましょう！あなた、今日は大根が食べられますわ！」

ぽかんと口を開けた男は、ぱくぱくと口を開閉し始める。

甘いひと時を、嵐の如くやって来た少女―男の長女^{むすめ}に対して、カッと頭に血が昇る。

「あ、茜~~~~~!!!!!!」

うらみがましい声で、少女――茜を怒鳴る。

茜は、うげつと声を上げ大根を天音に押し付け、

「では！お父様、お母様！今日のお勤めに行つてまいります！」

「さて！茜！！おまえの務めは甘味処で給女の仕事をするのはなく呪術師として腕を磨き！憎き清原家より宮廷術師の座を奪い返す――！、こうらあ!!!!!!茜~~~~~!!」

まくしたてる男に、茜は風のごとく来た道を戻る。

「あかね――！！！！！！！！！！」

耳をふさいで走る娘―茜に父親の絶叫は届かなかった。

墨原茜、16歳。

この、佐和の都に居住を構える元宮廷術師「墨原」家の長女だ。

「んーっ！今日もいい天気っ」

背伸びしながら、店の前を行き交う人々を見ながら洗濯日和だわとのほほんとつぶやく。

「茜、あんみつ上がったよ」

甘味処「小田部」の女将が台の上にあんみつと番茶を置く。

「はい」

出されたあんみつを盆の上に置き、椅子に腰を掛ける老女にあんみつを渡す。

「ごゆっくりどうぞ」

につこりと笑い、番茶も置いておく。

「お鈴さん。私、これから河部で豆剥きの仕事が入ってるから」

「そういえば、そうだったね。ん、いいよ。上がって…、ああそうそう、茜。最近夜になると頭巾をかぶった変な奴らがうるついつて話聞いたかい？」

お鈴と呼ばれた女将は、前掛けで手を拭きながら溜息をつく。

「あんたのことだから、夜遅くの仕事は受けないと思うけど物騒だから夕方には家に帰るんだよ？」

「もちろん。最近の都、なーんかざわついているっていうか…」

「術師としての、カンってやつかい？」

墨原家と言えば知らぬのは赤子だけとまで言われた、没落つぷりだが術師としては一流の血筋だ。

そして、その一流の血が茜もまた流れている。

「んー、どうかな。私は、お父様みたいに『何かが見える』なんてことはないし」

「っ、な、なにかって、なんあななんさ!？」

お鈴は、ずざつと茜より離れ厨房の柱の陰に隠れる。

（お鈴さんこの手の話苦手なんだよね〜）

くすくすと笑いながら、茜のいたずら心にぽつと灯が灯る。

柱の陰に隠れて、カタカタと震えているお鈴は茜にとっては、母と同じ年代の女性だけれど、人生の先輩だとは思えなくどちらかと言うと、とても気の合う友達のような関係だ。

だからこそ、こう、

いたずら心に灯が、ぽつと灯る。

「何かって、たとえばゆ——」

そう、たとえば、幽霊とか。

そう、にんまりと笑う茜が言葉を発した瞬間、

「いらつしゃいませ————————！！！！！！」

暖簾をくぐって入ってきた男に、お鈴は飛びつく勢いで悲鳴のような声を上げた。

「のわっ！？」

男はのけぞりながら、お鈴に引きつられ席に座らされ、茶をどんと置かれ、

「ささささつ、さ！どどど、どうぞー！」

お客である男―茜の知る限り―常連客に、ひきつった笑顔を向ける。さらにお客である男はそんな女将に身を引きながら目を白黒させていた。

茜は小さく嘖き出して、

「じゃあ、お鈴さん私、上がりますね。基晴さんもゆっくりして行つてね」

入ってきた常連客の男―基晴に茜は笑顔を向けて、荷物をまとめて出て行った。

「……………」

基晴と呼ばれた男は、啞然として出入り口にはためく暖簾を見た。お鈴は肘で基晴の頭を突き、

「あー、残念だったねえ、基晴。もう少し早ければ、茜とたんまり喋れたのにねえ」

やれやれと男の脳天をぺちぺちと叩いた。

「姐さん…っ！誰のせいでっ！だいたいっなんだよ！いきなり叫びだして！」

その肘を手で払う。

茜に会いたくて店にやって来たのに、言葉を交わす前に一瞬で、すべてが終わった。

基晴は、がっくりと頂垂れる。

ちよつと悪い気がしたのかお鈴は苦笑いを浮かべてこっそり耳打ちする。

「これから河部で豆剥きだつてさ。最近物騒だから、誰か迎えに行つて、送ってくれる人がいるとあたしは助かるんだけどな」

基晴がお鈴の顔を恨みがましく睨みつけ、

「ぜんざい、一個」

不貞腐れたように、机の上に突っ伏した。

河部で豆剥きの仕事を終え、茜色に染まる空を見上げながら茜は一人帰路を歩いていた。

墨原家。

かつて、都一の呪術師として知れ渡っていた一族。
そして、——堕ちて行った一族。

この佐和の国には、呪刑という死よりもっとも厳しい刑がある。

呪いによって、動物に変えられ冷魅^{れいみ}と呼ばれる谷に落とし——その姿のまま一生を終える。

谷に落とされた時に、死したのならばまだ救いだろう。だが、生きて谷底についた場合弱肉強食の谷の世界が待ち受けている。

そして、墨原はその術を行う第一人者だった。

宮廷術師の入れ替わりは、至って簡単。

その、呪刑を破られたのならば——それまで。

当時の墨原家の当主・雅盛の術が破られ——それまで、媚へつらっていた貴族・豪商たちは蜘蛛の子を散らすようにあっという間に墨原家は衰退していった。

今では、国で知らぬものは赤子だけの没落ぶりだ。

屋敷があるだけでもまだ良いと、茜は空を見上げながら思っていた。父は、ある日突然こう言い出した。

「清原憎し！打倒清原！！！」と。

彼女の父親はお家再興を望み術師として姉弟を育てようとしているが、そんな事をしているくらいなら町に出て小銭を稼いだ方が豪勢な食事にありつける。

米を買うのもやっとで、粥にして毎日食べている。

「んーっ」

背伸びをして、豆剥きでこった肩を揉みほぐす。

「今日は久々の大根！大根だよつ。大根の葉っぱのお浸しもおいしいんだよねっ」

浮き浮きとしながら、茜は鼻歌を歌いだすと、

「ん？」

小さな『鈴』の音が聞こえた。

『リーン…』

(?)

ぞわりと悪寒が走る――、見られている？

茜は周囲をせわしく見る。

誰かに見られている――、そんな『感じ』がする。呪術師としての本능が警告を促す。

じとり…と、背中に嫌な汗をかきつつも、懷にそつと手を忍ばせる。握りしめた数枚の『紙』。

呪術師が扱う術を生み出すための依代となる呪術師の術の媒介。

(……、なんだろう…なにこれっ)

茜にまとわりつく気配。

じりじりと気がつくつと、僅かずつ後退をしていることに気付いた。

『リーン…』

鈴の音と共に、ふっ…と気配が消えた。

「…？ なんなの…、一体…」

呆然と懷から手を抜いた。

どつと疲れが身体にのしかかる。

「うう…もう…」

帰って寝よう…。そんなことを考えながら茜は歩き始めた。
そして、足を止める。

とても、小さな、『鳴き声』が、聞こえた。
立ち止まり、草むらをじっと見つめる。

「きゅ…っん」

「？ 動物？」

苦しそうな鳴き声にたまらず草むらの中に入り込み、『ソレ』を見つけた。

黄金色をした、毛並みの良い、『キツネ』。
だが、

「っ、すごい怪我じゃないっ」

その腹部は赤く染まっていた。

第二話

薄闇の広間にて、数名の呪術師たちが小さな篝火を囲っていた。

「それはまことか!？」

一人の男は術衣を乱しながらも声を上げ、

「帝の居場所が判明したのか!!!？」

「はい。先程『網』にかかったようです」

「なんと!」

「では帝はご無事か!!!」

口々に呪術師たちは声を上げた。

だが、それを伝えた男は口ごもり、

「それが…、我々がその場所にたどり付きましたところ…」

あったのは、血痕のみ。

「……なんと…」

男は震えた声で呟き、額に手を当てた。

「帝、帝はいま…」

いずこに…。

丁寧に怪我を手当てされた狐が布を敷いた籠の中で丸まっている。
茜の5つ年下の少年・葵は狐の手当を終え、か細い息遣いの狐をじ

つと見つめていた。

父親と同じ漆黒の髪の色に、少し焦げ茶かった眼。葵は『キツネ』を見通すかのように、――じつと見つめていた。

「葵。そんなにじつと見てたら、キツネさん休めないでしょ？」
後ろからギュツと抱きついた茜から逃れようと葵はあわてて身をひねる。

「姉さん、いつまでも子供扱いしないでよっ」

「なによ。昔は、姉さま姉さまって、言ってくれたのに……。清十郎先生の所に行ってから、冷たくなってきてるわ」

さらにぎゅーと、抱きしめる。

「うみゃひっ」

奇声をあげて、葵はもがく。

ぎゅうぎゅうと茜の柔らかな身体にからめ捕られ、慌てさらにもがくがまだまだ体格が茜に劣る子供の葵は茜に良いように抱きつかれるだけで終わる。

ピクンつと狐の耳が動く。

「ねっ姉さま！狐の目が覚めたじゃないか！」

「葵が騒ぐから目が覚めたんじゃないの」

かすかに体を動かす。狐は体を起こそうと力を使っているようだが、

「駄目だよ。君は、怪我をしているんだから」

葵は茜の腕（というか、身体）から逃れ、そつと頭を撫でる。
気持ちよさそうに眼を細める狐に、

「ねっね！私も触りたい」

茜は猫にするように、首の下に指を入れ撫でる。

「それは……、どうかと思うんだけど？姉さん」

「あ、姉さんに戻ってる。」

茜は残念そうにつぶやくと、狐と目が合う。

かぶ。

「……………」

「ねえ、葵？ 噛まれてないけど、これって食べられてるの、かな？」
「あー…。ははは、じゃれてるんじゃないかな？」

隣で固まった姉と、はむはむと姉の指を口に咥える狐。
狐の口から指を取り出し、唾液でべったりとなった指を懐から懐紙を出し拭く。

「葵、私、今日はもう休むことにするわ…。キツネさん任せてもいい？」

「うん、いいけど…」

何か言いたそうにしている葵に茜は肩をすくめる。

曰く、何も言うな…。だ。

「キツネさん、葵はお医者さんを目指しているの。葵に任せたら、きつと傷なんてあつという間に治っちゃうんだから」

「姉さん、それはないから。術でも、傷を癒すことはできないのに、相手が動物だからってあつという間、とか変な嘘つかないでよ」

呆れたようにため息をつく葵とキツネの入った籠を持ち上げる。

「じゃあ、部屋で看病するね」

「うん、宜しくね」

居間より出ていく葵の背を見つめ、父と母がいるであろう寝室に目を走らせる。

血まみれのキツネを見つけた時に感じた——違和感。

あのキツネは、呪刑を受けている…かもしれない…。
ごくりと喉を鳴らす。

多分、あの鈴の音はキツネを探している呪術師の『網』の音だ。

厄介なことになった…のかな…？

茜はそう心中毒づきながらも、――助けたことには決して後悔はしていない。

カツコン。

獅子脅しが夜の静寂の中響く。

キツネを見た瞬間の父の視線の険しさと言ったら、茜の『もしかしたら』を決定づけた。が、傷の手当てなど何も異を唱える。逆に、早く屋敷の中に招き入れた。

父と娘は向かい合いながら、ただ睨みあっていた。

「狐の具合が良くなるまで、屋敷に置いてくれとな…？」
唸るような声を上げる父親に、

「だめですか？」

「駄目…と言っているわけではない。が、獣を飼うには金がいるぞ」
「お父様、誰のおかげでご飯にありつけると思っているんですか？」
につこりと満面の笑みを浮かべる茜に、父はうめき声を上げる。

黒墨家、当主―秋守は澄まし顔の娘に大きくため息をつく。

「お前も気づいているはずだ」

「そうですね」

「ならば、『何故』？」

秋守の瞳が鋭く茜を射抜く。

下手な言い分では、決して許さないと視線で言われている。

茜は負けずと、父親を睨みつけて、

「呪術を受けている、それは『呪刑者』。咎人と知って助けるのは大罪ということを理解しています、が、お父様。私は、消えゆく命を見捨てられるほど、強くはありません……」

「……、つまり、茜。おまえはただ、『アレ』が死ぬのが嫌だというわけか？」

「とりあえずは、そうです」

とりあえず、といった娘の顔をまじまじと見つめ、張りつめた空気が一瞬和らぐ。

腕を組みながら、秋守は苦笑いを浮かべる。

「所詮、私の娘ということか……」

「あたりまえです。おじい様に勘当されて、黒墨を捨てた男の——娘の茜です」

黒墨家の当主たる秋守は家を捨て、下民として暮らしていたところがある。

茜はそれを口さがない呪術師や貴族——または町民によってあれこれ吹きこまれていた。

一時期はそれによって、親子の確執もあつたりはしたが……現在は良好なはずだ。

カコン。

獅子脅しが、響く。

満面の笑みを浮かべる、父と娘。
そして、

「あらあら。ちょっとやけちゃっわ」
のんびりとした母の声が響く。

天音はニコニコと微笑ながら、

「茜もあなたも秘密事？」

小首を捻る。

茜はキツネの事をどうしようかと一瞬、秋守に視線を向けたが秋守の青から白へと変わる顔を見た途端――何も言わない方が身のためだと口を貝にする。

秋守はいや、なんだ、その、あれだともごもごとつぶやいているが天音の微笑みは揺るがない。

「あ、な、た？」

ひっと短く悲鳴が聞こえたような気がしたが、茜は身を縮めて茜に對する天音の無言の威圧を耐える。

どういうわけか、家族の中で一番の『支配者』は母親だった。

父いわく、天音がいないと死んでしまっ、らしい。

なので、幼いころから「母様を困らせるな、泣かせるな、怒らせるな、マジで」と言い聞かせられてきた。そして、時に秋守がこっそりと散財すると天音の何かがキレる。ぷつつりと。

その様はまるで『鬼』のようで…。

二人の姉弟は、一方的に泣く父親の（無様な）姿を脳裏に焼き付けられ――母逆らうべからずという家訓ができた。

「あー、なんだ。問題ない。まるっきりなんでも問題はない。大丈夫だ、ああ、大丈夫だ」

「そうですか」

カクカクと頷く秋守に天音は微笑を向け、

「そ、う、で、す、か」

一瞬黒い炎が立ったように感じた。

茜は明日早いので！と声を上げその場を逃げる。その際に、父の逃げやがった！！という絶望的な顔を見なかったことにする。

（明日、お父様の料理に一品多くつけれるように、しよう…）

小さな謝罪は言葉より、お腹で満たしてもらおう事にしよう。
そんな風に、小走りで部屋へと戻った。

第三話

本日は晴天。

茜は背伸びをして、水色の空を見上げた。
雲ひとつない、空。

「…いい天気だわ…」

縁の下でのんびりしていると、パタパタと足音が聞こえた。
茜は足音のした方を見て、やって来た人物―天音に声をかける。
「お母様、どうしました？」

「え？」

問いかけに天音はぱくりと瞬きをし、考え込むように茜から視線を離し―そして閃いたように手を叩いた。

「茜、ちよつとお願いがあるの」

「？ はい」

「畳み干しをしたいのよ」

「？ はい？」

畳み干し…、確かに今日はいい天気だが…。

「あの、お母様。私、午後から小田部で仕事があるんですけど」

「ええ、わかつています。けど、こんなに良いお天気なのよ？」

気持ちにはわかるけど…。

どうしようかな…と空を見上げる。

午後までの少しの時間、畳み干しを手伝おうか…。

「どこの部屋からするんですか？」

「秋守さんのお部屋から」

「…お父様の部屋から先ですか」

さり気なく、何事も秋守を優先する天音に面白くないと視線で訴える。

「その次は茜、そして葵」

その視線をもともせず、微笑を浮かべる『母親』に、肩を下ろす。

「お母様の部屋は何時なさるんですか？」

さすがに3人分の畳み干しでは午前中までに終わらない。むしろ一日かかる。

「私の部屋はそうね、また今度」

「もう！お父様の部屋を先にするよりもお母様の部屋を先にして、その後にお父様！そしたら葵！」

「まあ、そうしたら茜の部屋ができないわ」

「私の部屋は、また今度です」

いつも自分のことを後回しにする天音に溜息をつきながら茜は畳をさつさと干すために天音をせかす。

「早くしないと小田部に遅刻しちゃいます」

「ああ、そうね。ごめんなさい、茜。大好きよ？」

そう言って天音は茜を抱きしめ、

「いつも苦勞をかけてごめんなさい…」

小さく謝罪をした。

しばらくして畳みを全て干し、「私の部屋は良いのに」と言っただけ茜の部屋の畳を率先して干そうとする天音と少々口論となったり、小田部への時間に遅れそうになったりと慌ただしく茜の一日が過ぎる。

満天の星空の下、さっぱりとお風呂に入りたい。——そう思いながらも、薪代もばかにならず茜はたらいにお湯を入れ自室の床に置く。

「キツネさん」。具合はどうですか？」

キツネを入れた籠を覗き込み、寝息を立てているキツネの柔らかな毛にそつと触れる。

まじな
呪いを施されたキツネのために、『何かあった時』対応できるものが見ることとなり、それは秋守か茜の二人しかいなかった。したがって、一晚葵の部屋で休んだキツネは今晚より茜の部屋へと移ってきた。

「……ん…だいじょうぶ…」

微かに感じ取れる、呪術。

複雑で絡み合うように組まれた、『呪刑』。

この呪刑を解けば、清原を追いおとし再び黒墨が宮廷の頂点に立てる——だが、

（お父様は、呪刑を解け…とは言わなかったわ。当たり前だけど…罪人の刑を勝手に解くことは許されない）

けれど、あの秋守ならば清原を追いおとすために言いそうだ。

（お父様も、ちゃんとした呪術師なのね）

かつては、森波と呼ばれる集落ではぐれ呪術師として町の人間に『忌み嫌われていた』秋守だが、今では人並みに『嫌われて』いる。嫌われ方も、からかわれるような揶揄を飛ばすような、気さくな感じの嫌われ方だ。

（みんな、嫌い嫌いっているけど私や葵、お母様には優しいし。なんか同情してくれてるし…？）

小さく笑う。

秋守の様な男に良い嫁が…とか、小田部の常連の男性がぶつくさ茜に愚痴る。

「さて、と…」

キツネの状態を確認した茜は、手ぬぐいをお湯に付け、水を絞り着物の上着を脱ぎ長襦袢姿となる。

襦袢の帯をほどき、上半身裸になると手ぬぐいで身体を拭いていく。「ちよつと、埃っぽいかな？」

黒い髪をひと房掴み、濡れた手ぬぐいで拭いてゆく。

もう少し暖かいと行水も良いかもしれない。

髪を丁寧の手ぬぐいで拭いて行く。

身体や髪を拭き終わると温くなったお湯に手ぬぐいを付け、

「明日も晴れるといいなあ……」

そう呟いた。

キツネは微かに気配を感じる。

人だ。

人が動いて、喋っている。

だが、瞼は重く——何をしゃべっているのかわからない。

暗闇が、『新月の夜』を呼び起こす。

荒々しい足音と、禍々しい気配が満ちていたあの『夜』を。

キツネは人だった。

人の形を持っていた。

キツネがどのような人だったのか、まだわからない——。思い出せない。だが、

あの日の言葉は——声は、脳裏に焼き付いている。

悪意に満ちた建物を走る。

「っ帝！」

現帝の寝所に荒々しく踏み入れ、

「来るな！来るんじゃない！」

叫びが鼓膜を震わす。

『帝と呼ばれた者』は、黒い文字の帯に身をからめとられ、

「来るんじゃない！」

来てはならない！

喉が張り裂けるほどの叫び声をあげる。

暗闇にのみ込まれそうになる、帝に誰かが手を伸ばし、引き上げる。

「——っ！」

誰かに、または帝に名を呼ばれたような気がした。

だが、

「わ、私はっ——っあああ——！！！」

寝所にあふれる、闇色の光。

身体が変わる――。

暗闇に支配される。

抱えられる身体――。

引きずる身体。

『ワタシハ――』

「本日も晴天なり、まる」

雲ひとつない、真っ青な空を見上げ、茜は柄杓を手に背伸びをした。

キツネを助けてから、3日後。

起き上がる程度に回復したキツネに対し、『動物の本能か、それとも人間だったころの本能か――生に執着する意志とはすさまじい』

…そんな事を、秋守がぼやいていた事を茜は思い出す。

甘味処「小田部」の店先に水をまきながら、あのキツネが元気になったかどうか、と考えを走らせる。

まず、家で飼うのは無理だろう。

金銭的面――ではなく、あのキツネが本当に「呪刑者」だったら家族に及ぼす被害はキツネ一匹の命を比較しても比較しきれないほど

甚大だ。

キツネと家族を取るなら、家族だ。

呪刑者だと、気がついたのは家で手当てをもらって最中、もしも、家に連れてくる前に気がいたらそのままにして置いたか？

（助けるわよね、やっぱり。初めからわかっていても…）

それに、

「助けちゃったんだから、見捨てるのも…ね」

出来る限りの力にはなりたい。

だって、冷魅^{れいみ}に落とされた後、冷魅^{れいみ}を越えたのだから――。
雲ひとつない空に、小さくぼやく。

「うわっ」

悲鳴にはつと息をのみ、茜は水に濡れた若者の姿を認識した。

薄水色の爽やかな着物は肩の部分が水がしみ込んだ後で色が変わっており、黒髪の短い髪の前からは雫が垂れていた。

驚いた若者――青年の顔に茜は血の気が引く思いだ。

自分の手には、柄杓。

自分は、今、水まきをしていた。

顔立ちの良い青年の衣服を見ると貴族級の人間だと一目でわかった。

「っ、もっ、申し訳ございませんっ！」

慌てて懷から手ぬぐいを出し、若者の服の水分を取ろうと近づくと、
「無礼者！小娘！若様になん――」

「寧、やめなさい」

「ですが！」

若者のすぐ側に、寧と呼ばれた少女が茜を睨みつけ、腰にある刀を抜き放とうと構える。

若者が寧を押しとどめ、真っ青の茜に忠告をする。

「きちんと前を見て、行いなさい」

「申し訳ございませんっ」

深々と頭を下げる茜に対し、寧は顔をゆがめる。

「土下座くらいしなさい、下民っ。若様の着物に水を――」

「寧、いい加減にしろ」

「……」

若者の低い声に息をのみ、寧は小さく謝罪をした。

「な、何の騒ぎだい?!」

店の奥からお鈴が現れ、茜と、若者を見、状況を理解した。

「この店の者ですか？」

「え、ああ。この店の女将のお鈴、と」

「彼女に、もう少し前を見て水を撒くようによく言って聞かせてください」

茜を一瞥し、若者は寧を引きつれて歩き出す。

「あの、これを――」

慌てて手ぬぐいを渡そうとする茜に、

「わざとではないのは顔を見ればわかります。すまないと思うのなら、考え事をしながら仕事を行わないでください」

手ぬぐいを受け取ることなく、去って行った。

昼過ぎ、休憩の為に暖簾を下げた小田部でお鈴と二人向き合つて番茶をすする。

「昼間のありや、扇の若様だね」

「おうぎ？」

首をひねりながら、茜は机の上に用意された捻り菓子を口元に運ぶ。
「ああ。扇の若様。あんた、黒墨家の長女のクセにわかんないの？
ていうか、あれほどの顔の持主だよ！？気になんないの！？女として！！」

肩をすくめるお鈴にむつとしながら、昼間の青年の顔を思い出す。
確かに、あれほどの顔の持ち主だろう。

見目は良かった。

「お鈴さん、うちは没落しています。お貴族さまとなんら関係はないですよ？あと、まあ確かに、顔は良いけど…。愛想ないような気が…」

どこか冷たい印象を受けた茜にお鈴は苦笑いを浮かべた。

「扇の若様に愛想を求めるのはおよし。それにあの人は貴族『じゃない』よ」

「でも、私が知っているのは呪術師の家系くらいよ？」

「家系、ねえ。あんた、本っ当に呪術師の子かい？」

「呪術師じゃないわ。お鈴さん。いまはただの一般人よ」
番茶をすすり、けろりと茜は答える。

確かに呪術師をして技を叩きこまればしたが、呪術師として生活していくことはないと思っている。

黒墨に関わる主要家以外は興味もなく――

（昼間のあの人は、呪術師家系の若様つてことね）

番茶をすすりながら茜は呆れているお鈴に言った。

「でも扇つて名、聞き覚ええないわ。私の知っている呪術師と言えば、『清原』『青森』『賀屋』『志守』だわ」

扇なんて…。

考え込むように、うつむくとお鈴の盛大なため息が聞こえる。

「扇って言うのは、『古扇』の『志守』って言うの」

あつと茜は声を上げ、

「古扇！ああ、なるほど。それでいまどき珍しい女剣士が側に居たのね」

手を打ってすっきりとした表情で笑う。

「古扇と言えば、多くの女剣士を輩出した剣術道場の名で、まあ、あたしらは『扇』って言うけどね」

「へー…。始めて知ったわ」

「はあ。あんた、本当に話題に疎いわねえ。疎いと言うよりも興味ない、の間違えか…。扇の若様っていえば、その剣術道場の師範佳苗と、志守六皇との間の息子だろうにっ」

気のない返事をお鈴に返し、茜は肩をすくめる。

（他の呪術師がどうのなんて、お鈴さんが言う通り興味ないもの。私は、今の生活でいっぱいいっぱいだし…）

今が幸せ。

呪術師とか、呪術とか、

お父様が冗談半分にたびたび口にするお家再興とか。

（他の呪術師…かあ）

今が幸せ。

だけど、先日『今』を壊す広いものをした。

（今の呪刑の責任者は『清原』家。あのキツネの術者は『清原』家当主——）

「ねえ、お鈴さん。扇の若様ってどのくらい人気があるの？」
「ふえ？」

捻り菓子を口に含んだまま、声を上げるお鈴に、

「だって、お鈴さんはさつき、『顔が良い』とも『話題に疎い』って言ったじゃない？」

机の上に身を乗り出して、お鈴に言う。

訝しむお鈴は、

「まあ、町娘は大概、若様のこと夢中だね。やれ、会えば今日は晴れたの、やれ会えば茶柱が立つたの——」

「それって、どんな人気よ!？」

「出会えば、ご利益があるって噂の若様なんだよ!さすが呪術師というところじゃないの?」

ちなみに、手を握ればご利益は4倍だね。と笑う女将に、茜ははつと息をのむ。

わなわなと身体を震わし、

「それって、じゃあ、私にご利益が!今より4倍の幸せが!？」

「あんた、若様に水ぶっかけ解いてそんなものあると思ってるの?あるなら今から4倍の『厄』でしょうに」

「あああゝ」

頭を抱えて茜は机の上に突っ伏し、勢いよく顔を上げた。

「ちなみに、噂は本当?効き目は?」

「ぱっちり本当。ぱっちり4倍」

親指を折り四本の指を茜に立てて見せ、茜は顔を青くし再び突っ伏した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1382t/>

茜の呪刻

2011年12月7日12時45分発行